



毒親と教育虐待

毒親とは、子どもを支配したり、傷つけたり、ネグレクトしたりして「毒」になる親のこと。

教育虐待とは「子どもの受忍限度を超えて勉強させること」。近年では、習い事を含む教育活動全般(スポーツ含む)のことを指すようになっていく。(2011年日本子ども虐待防止学会)

3月8日 金曜日

高知大学の是永かな子教授が来校され、佐喜浜小の子どもたちの成長の様子を参観し、今後の学校での接し方や指導方法について、細やかなアドバイスをいただきました。そして、全般的に順調な育ちぶりであるという是永先生からのお話に安心しました。

その中で、是永教授から、今ネット等で若い方々から声が上がっている上記の「毒親」と「教育虐待」についての情報提供がありました。どのご家庭がとかいうお話ではなく、子育ての中で気を付けていく必要がある、とのことでした。

「毒親」も「教育虐待」も、真意は子どもを愛する故だとは思いますが、子どもにとっては大迷惑ですし、ひどくなればトラウマになり、人生を悲観したりする場合もあるそうです。不登校の原因の多くにも、これが関係しているそうです。

特に「教育虐待」と「熱心な教育家」との境目はグラデーショナル的で曖昧です。適度な期待や応援は、必要ですが、それにはその子の気持ちや与えられた環境や経済を含めた社会状況を見極めながらの期待等でなければなりません。このさじ加減が難しいのですが、それが子育ての面白さでもあります。また、ここに親でなければ味わえない心の安らぎや感動があります。

これは、学習ばかりではなくスポーツの場合も同様です。特にスポーツの場合、過度な期待が、体罰や暴言や不適切な関わりにつながったという事案が多々あります。私が関わっているジュニアバレーボール界でも、本部に類似的な訴えが多く上がってきており、大きな問題となっています。

これを防ぐには、「結果で評価ではなく、プロセスで評価」を常に心がけていくことが肝要となります。

子どもは周りの期待に応えようとがんばっています。その過程を評価し、結果が出ればさらに評価すること、加えて周りの大人がそのお手本となる行動に心がけていくこと、そして社会や地域のリーダーである年長者がその大人たちをしっかりと認めていくこと、これが結果的には良き子どもを育てる鍵になるのです。そう考えていけば、「教育虐待」は、個人や家庭の問題ではなく、地域社会全体の問題であるとも言えると私は考えます。この子育ての難しい時代に、子育てに時間と力と資金を割いてがんばってくれている方々を、社会全体で応援する体制の構築は、今や絶対必要です。1年間の出生数が3000人台の高知です。他県の方もひどいですねえ、と言っています。手遅れにならないうちに。

「佐喜浜小学校がこれからも素晴らしい学校であり続けますように」。是永先生の本校へのイメージや期待にも応えるべく、これからも教職員一同、地域とともに学び続ける集団でありたいと思います。

